証聖者マクシモスの愛についての四〇〇の断章

序言
エルピディオス神父よ[修道の生活について]の論述に加えて[愛について]の論述を四つの一〇〇ずつの断章にまとめて送ります。すなわち、私は聖及び教父たちの言葉を渉猟し、そこから[愛とという主題に ふさわしいものを選び出して、それらの多くを思い明瞭に[まとめたもの]に過ぎないです

第一の一〇〇の断章
(1) 愛(ἀγάπη)とは魂の善きあり方・秩序(ἐλαθίας)であり、それによって、いかなる存在者も神の知(γνῶσις τοῦ θεοῦ)に優って尊ばれることがない、そして、地上的何ものへの執着をもっている人は、右のような愛によって秩序づけられた道に達することができないのである

(2) 情念からの解放・離脱(不受動心 ἀπάθεια)が愛を生み出し、神への希望(ἐλπίς)がそうした情念からの解放を生み出す。神への希望は忍耐と実践なくによって育まれる。忍耐はまったき自制・完全の生み出すところであり、神への現れ(θόβος)が自制を生む。まったくした神への現れは主への信仰(πίστις)によって生み出されるのである

(3)主を信じる人は罪を携れる。罪を携れる人はもろもろの情念(πάθος)を制する。情念を制する人はさまざまの苦しみに耐える。苦しみに耐える人は神への希望をもつに至る。神への希望はすべての地上的な執着から人を離脱せしめる。そして、かく離脱せしめられた精神は神への愛をもつであろう

(4)神を愛する人は神の知を、神によって創られたあらゆるものよりも低価値あるものとみなし、たえざる信・祈求によって神の知を追い求める

(5)もしあらゆる存在者が、神から、または神のために創られたとすれば、神は、神によって創られたものなるがために優って、より良い、それゆえ、より善きものを捷びて、より悪しきものを捨てしまうのは、自分が、神自身よりも神によって創られたものの[ほうを価値あるものとしているとい]うことを自己露呈させているのである

(6)神への愛に確固たって精神(νοῦς)を据えている人は、見える者のすべてを、そして、自分自身の身体をも、何か自分にとって疎遠なものであるかのように見ている

(7)もし魂(ψυχή)が身体よりもより善きものであり、世界を創った神が世界よりも比較的優れており、従って、もしも身体を尊び、神によって世界よりも尊ぶ人は、神を尊び、神によって生したものを創り手たる神よりも尊んでいるのである

(8)精神を神への愛と献身とからり離れて、何か感覚的なものに結びつけてしまうような人は、魂よりも身体を尊び、神によって生したものを創り手たる神よりも尊んでいるのである

(9)もし精神の生命が知の照らし(ὁ κατὰ νοῦν τῆς γνώσεως)であり、神への愛こそが不死なる知の照らしを生むのであれば、まことに、神的な愛よりも大いなる何ものかを愛する者は、神を愛する人ではない

(10)精神が神への愛に燃え立って自己の外に出ると、自己自身をも他のいかなる存在者をもたった感知しない。なぜなら、神的な無限の光に照らされた人は、神によって生ぜられたものすべてのものに対しなんら感覚するところがないからである。それはちょうど、太陽が高く昇ったときには、太陽光が星をなんら感覚しえないのと同様である

(11)すべての徳は神的な愛に向けて精神を促す。が、どれひとり純粋な知(ἡ καθαρὰ κατανόησις)はすべに優って、そうした働きをなす。というのは、純粋な祈りにおってこそ精神は神へとはばたく翼を得て、あらゆる存在者の外に出るからである

(12)精神が愛を通じていわば神的な知によって導い去られ、もろもろの存在者の外に出て神の知識に達する。「おお、私はなんと慎れなことか、私は心貧しい、汚れた罪の者、私は汚れた罪の民の中にすんでいる。しかも、私の目は万軍の王なる主を仰ぎみた」

(13)神を愛する人は、たとえいまだ浄められていない人への情念の中にとどまっていたとしても、神を愛する人は、彼らが回心して正しい生を送るようになるのを見ならう。限りなく、たとえ悪い人間であっても